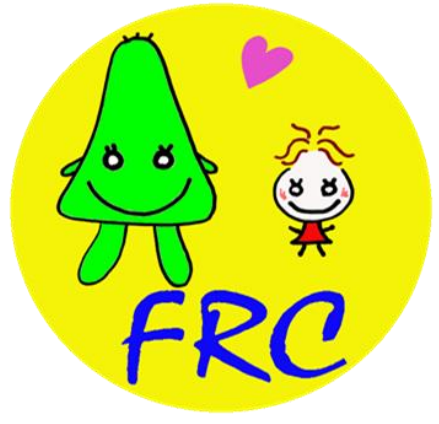


悪性腫瘍を発症した重症心身障害者に対する 緩和ケアの試み 第3報



東京都立府中療育センター 看護科 荒谷 智子 柿原 富美
小児科 齋藤 菜穂

第1報、第2報の症例に関わった看護師において、緩和ケアに対する意識の変化が61%にみられた。アンケート及び多職種カンファレンスの結果を7つのカテゴリーに分け分析し、報告する。

重症心身障害児者に対する想い

長期入所で関わっている時間が長いため、より深い感情が生まれ、「苦しまないこと、つらい思いをさせないこと」が早期からの目標となり、治療開始と同時に緩和ケアの導入につながった。



緩和ケアの困難さ

意思疎通・意思決定が困難であり、利用者の代弁者としての役割を担う必要がある。
独特な痛みや苦痛の表現がある。



統一した看護実践の必要性

多職種カンファレンスで評価しながら、独自に作成したスケールを使用した。客観的な指標(行動や表情)を用いるため、スタッフ間での共通認識が必要であり、痛みのマネジメントに対する意識の向上につながった。これにより、統一した看護が実践された。



看取り

元気に過ごしてきた時期から、徐々に病状が悪化し、亡くなるまでの人生の軌跡を一緒に過ごすからこそ、一人ひとりが看取りについて考えを深めることができた。



関わりを通しての学びと意識の変化

痛みを伝えてくれないからこそ、受け取る側の看護師が訴えを敏感に感じとりいつもと違う様子に気付く能力が必要である。



緩和ケアに対する知識の獲得、思考力の向上

疼痛緩和の成功体験が自信につながり、看護の質が向上した。利用者の最善の利益を考えて日々のケアを丁寧に積み重ねることがQOLの維持向上へとつながる。



看護師の役割

利用者が穏やかに過ごせるように援助する責務があると感じた。カンファレンスやアンケートでケアをふりかえることで、看護としての意味づけができた。



まとめ

- 多職種カンファレンスによって、チームが統一した方針で介入でき、各職種が専門性を発揮することが、QOLの維持・向上につながった。
- 独自のスケールを作成、使用することは、看護師が訴えを敏感に感じ取る能力が必要であることを再認識した。
- 関わりを通し、緩和ケアに対する知識の獲得・思考力の向上につながった。

